# 体育の「越境的な学習」についての実践的研究

## －小学５年体育授業を通して－

竹内　隆二　（　愛知教育大学　）

### １．目的

平成 29 年度の告示の小学校学習指導要領を受け、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた手段を用いた授業実践が行われるようになった。しかしそのほとんどは、規程の学校、学年、学級という固定された中で行われており、それが、劣等感や嫌悪感を育むことにつながり、主体的な学びを阻害していると考えた。

そこで本研究では、「越境的な学習」を体育授業に取り入れる。これが、先述の問題に対して、どのように作用するのかを探り、その成果を明らかにすることを目的とした。

### ２．研究方法

１）実践Ⅰは、小学５年生と中学２年生による器械運動（マット運動）の授業をM中学校で実施した。実践Ⅱは、小学５年生と小学１年生による陸上運動（リレー）の授業、実践Ⅲは、小学５年生とデフリンピック選手らによるボール運動（ネット型）の授業をどちらもＴ小学校で実施した。

２）上記３つの実践から、授業後のリフレクションシート、活動を撮影した動画や静止画、さらには筆者自身の観察記述のデータを収集した。

３）収集したデータの中から、「越境的学習」の視点を中心に考察した。

### ３．結果と考察

１）　実践Ⅰでは、小学生中学生両方の意見が反映されるなど、双方に情報量の増加、前転のバランスや立ち易さに回転速度が影響を与えているとした記述がみられるなど、新たな気づきや学びが生まれた。さらに、劣等感や苦手意識をもっていた子にとっても楽しく、学べることが示唆された。

２）　実践Ⅱでは、これまでのリレーに対するイメージが多くの５年児童にとって変わった。さらにリレーに対して「どうせ勝てない」という子もいたが、その子が実践後「意外に楽しい一面もある」と記述した。これはアイデンティティに変化が起こったと考えられる。さらに、1 年生にとってはバトンの受け取り方、5 年生にとっては、異年齢の子とのリレーの楽しみ方など、新たな気づき、考え方が生まれた。つまり、双方にとって学びが生まれたことが示唆された。

３）　実践Ⅲでは、5 年生にとっては、相手のいないところをねらうことや、三段攻撃の意味や意図が学べ、デフリンピック選手らは、子どもとの接し方などの学びが生まれ、「知識の仲介者（ナレッジ・ブローカー）」が出現する可能性が示唆された。

### ４．結論

本研究では、「越境的な学習」を体育授業に取り入れた成果を明らかにすることを目的とした。

実践の中で、進んで対話を行う様子が見られた（対話的）。また、新たな気づきや発見が生まれたり、情報量が増加したりし、双方に学びが生まれたことが考えられた（深い学び）。さらに、劣等感や嫌悪感を抱かない、もしくは、軽減されたことで楽しんで活動する姿が見られた（主体的）。これらのことから、「主体的・対話的で深い学び」に向かう可能性があることが考えられた。

### ５．主な参考文献

１）エンゲストローム，山住勝広ら訳（1999）拡張による学習―活動理論からのアプローチ―，新曜社.

２）石山恒貴（2018）　越境的学習のメカニズム，福村出版.

３）香川秀太，青山征彦（2015）越境する対話と学び，新曜社.

４）文部科学省（2017）小学校学習指導要領.

５）森勇示（2019）越境的学習としての体育―附属学校での挑戦的実践―愛知教育大学研究報告　芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編，68，pp51 -59.

６）レイヴ，ウェンガー，佐伯胖訳（1993），状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―，産業図書.